

Skene, D. S. (1963) The fine structure of apple, pear and plum fruit surfaces, their changes during ripening and their response to polishing

Ann. Bot. 27: 581-587.

Warburg, O. (1895) Balsaminaceae africanae Engler's Bot. Jahrb. 22: 46-53.

八ヶ岳山麓のサクラ

久保田 秀 夫

H. Kubota: Cherries growing in lower mountainous region of Mts. Yatsugatake

長野県は今さらいうまでもなくサクラの種類に富み、海岸生のオオシマザクラを除く他の種類はいずれも自生している。北信のオクチョウジザクラ、木曾谷と下伊那の天竜川沿岸とその流域のキンキマメザクラ、中信八ヶ岳方面のマメザクラの自生などは全県下の山地帯以上に分布するオオヤマザクラや亜高山帯に多いタカネザクラなどと相まってその豊富なことを物語っている。

私は十数年サクラの分布を調べて日本各地を歩き、長野県の山地もかなり歩いたが、八ヶ岳のサクラことにマメザクラについては花時に調査したことがないのでその機会を望んでいたところ、たまたま1974年5月釜無山にサクラを調査したついでに八ヶ岳の登山口の一つである美濃戸の下部一帯を調査することができ、続いて1975、1976年と美濃戸の下方部、富士見広原方面、編笠岳の登山道から観音平、八ヶ岳横断道路、美森、清里、大泉方面を花時を中心にして調査した。八ヶ岳の美しい山麓一帯はすっかり開発され、広い舗装道路が縦横に走り、分譲地の立札、別荘が立ち、伐採をまぬかれたタカネザクラやマメザクラが宅地や道路沿いにわずかに咲いているのを見ておどろきと憤りを禁じ得なかった。調査範囲は広大な山麓のごく一部であるが、この地域に自生するサクラについて少し記してみたい。

この調査にあたり諏訪教育会所蔵のサクラの標本の閲覧の便を計って下され、種々助言をいただいた茅野慶次氏、八ヶ岳のマメザクラの分布について採集地を图示して下されご教示をいただいた坂本圭司氏、いつも同行案内の労を惜しまれなかった宮坂誠文氏にあつく御礼申しあげる。

〔調査地域〕八ヶ岳農場の上方から美濃戸山荘にいたる間の柳川、横瀬堰、阿弥陀岳登山道の下部、富士見町広原から八方苑開発地付近、小淵沢町編笠岳登山道観音平、観音平上り口蛙石から八ヶ岳横断道路、美森、清里、大泉駅にいたる周辺地域、海拔1300mから約1600mにいたる間である。

〔花期〕これらの北域においては過去3回の調査では5月10日頃から1週間ぐらいが開花の盛りである。い

ずれの種も花期はほぼ同じ。ただマメザクラとタカネザクラは亜高山帯に上っておりことにミネザクラは広く分布して花期は6月中旬に及んでいる。

〔種類〕下部にはカスミザクラが多く、中間地帯にマメザクラ、チョウジザクラ、オオヤマザクラがあり、上部にはタカネザクラが多くなる。しかしこれらの混生する地域では自然雑種と推定されるものが点生する。

各種類について以下に記す。

カスミザクラ *Prunus verecunda* Koehne

最も普通に見られる種で、この地域ではおおよそ1300~1400m付近まで自生するが、1400m付近になると個体は非常に少くなる。小海線の甲斐小泉~清里間には個体が多い。

a. チョウセンヤマザクラ form. *tomentella*

Kubota et Moriya

ビロードカスミザクラともよばれ、カスミザクラの葉や花序に毛の多い品種でときにはがく筒や花柱に毛のある個体もある。八ヶ岳農場の上方、蛙石、甲斐大泉駅付近で見た。

チョウジザクラ *Prunus apetala* Fr. et Sav.

この地域では個体は少く、点生している。美森方面では1500m付近が上限のようである。

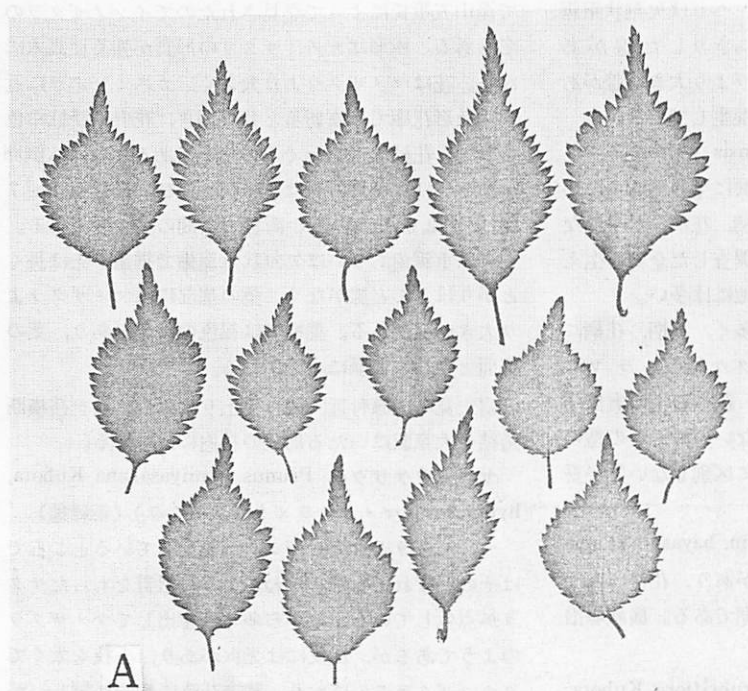
オオヤマザクラ *Prunus sargentii* Rehder

a. ケエゾヤマザクラ form. *pubescens* Ohwi

オオヤマザクラの葉柄や葉裏の中肋・側脈・花柄などに毛のあるケエゾヤマザクラの方が多く見られる。とくにこれらは柳川や横瀬堰の周辺には比較的多く見られる。このあたりを精査すればオネヤマザクラ *Prunus oneyamensis* Hayashi (チョウジザクラ×オオヤマザクラ)の自生が見つかるように思われる。

マメザクラ *Prunus incisa* Thunb.

フォツサマグナ要素の植物の一つで、関東の西部、南部、静岡県東半部に分布する。八ヶ岳では1200~1600mの間に広がるが、先にも記したようにタカネザクラと共に亜高山帯の2000m付近にも自生している。八ヶ岳における代表的なサクラといえる。サクラ属の中ではもっとも低木で、葉や花も小形である。茎は基部から多く分れ、分枝多く、枝は細く、樹皮は灰



A

Prunus incisa マメザクラ

黒色、ざらつき光沢のないのが普通である。葉は欠刻状の重鋸歯があり、鋸歯の先はすどく尖り、腺がない。また葉の基部かそれに近い縁にカニの眼のような突出た小さな腺があるので他の種と区別がつく。果実は黒熟して甘味があるのもこの特徴である。花柄の長短、毛の有無、がく筒の形など変異の多いものである。枝は切ってもよく伸長し、多くの品種が知られており、盆栽としても広く培養されている。

a. トキノスザクラ form. *tokinosu* Sugimoto

花卉の先端が紅色をおびる美しいマメザクラで、美濃戸下方、観音平付近に自生する。

マメザクラは諏訪地方では八ヶ岳を中心として分布範囲はどうかさらに調査する必要があるように思う。諏訪教育会の標本の中には採集地を単に八ヶ岳と記入したものが多く、今後ははっきりと自生地の記入を希望したい。また分布については高ボッチ山、鉢伏山、碓氷川沢等もあげられ、東筑摩郡

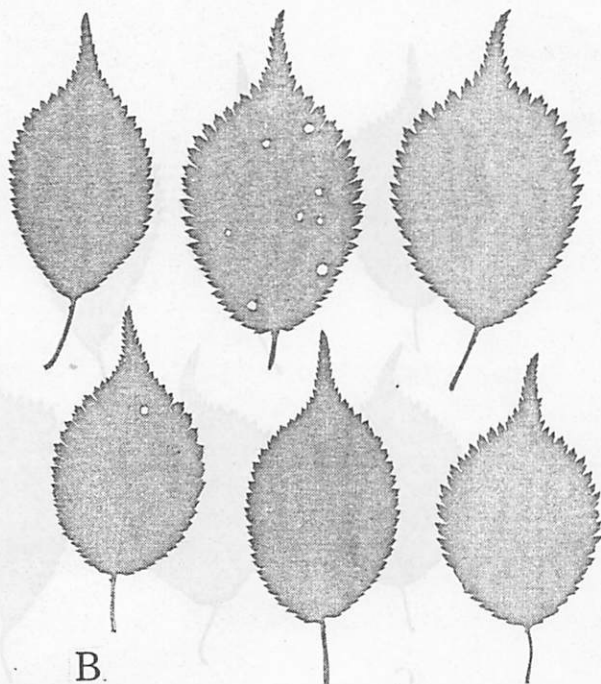
四賀村の山地の一部もその一つとして報告されているが、私は今後確かめたいと思っている。また下伊那の山地にはマメザクラとキンヤマメザクラが自生する報告があるがマメザクラが果して下伊那の山地にまで分布しているかについては疑問がある。(私は先年下伊那教育会のサクラの標本を村松光喜氏の好意で見せていただいたが、マメザクラについては花がなくはっきりしなかった。)

タカネザクラ *Prunus nipponica* Matsumura

1450m付近から上方に広く生育しており、八ヶ岳のサクラの中では個体の最も多いものである。2,30年前には明治の湯、奥蓼科温泉へ行く道の周辺一帯にはこの群落がすばらしかったこ

とをおぼえている。長野県下でも八ヶ岳はこのサクラの豊富な地域である。

低木～小高木で樹皮は紫褐色～紅褐色で光沢があり、小枝も太い。花は新葉と共に開き、花柄は長く伸



B

Prunus nipponica タカネザクラ

びる。葉はマメザクラより大きく、へりは欠刻状重鋸歯で、先はするどくとがらず、はっきりした腺があり、また葉柄の先端にはマメザクラより大きい腺がある。低いところではマメザクラと混生している。

a. チシマザクラ var. *kurilensis* Wilson

タカネザクラの葉は幼時は表裏共に毛のあるものが多いが、成葉でも密毛が残り、葉柄、花柄、かく筒などにも開出毛のあるものである。調査した全域に生えているが、ことに横瀬堰沿いの山地には多い。

タカネザクラは毛による変異が多く、葉柄、花柄に毛があり、かく筒にないものをタカネザクラ var. *pubescens* Koidz. とよばれるが、花柄の毛の有無などは花時の標本でなければ判明しないので、この型のももチシマザクラの1型と考えて区別しない方が妥当であると思う。

b. ビロードチシマザクラ form. *hayashii* Honda

葉、花柄、かく筒に白色の絨毛があり、花柱にも毛のあるもので、チシマザクラ極端型である。横瀬堰沿いで1株見た。

c. ペニチシマザクラ form. *rubriflora* Kubota, f. nov. (新品種)

花卉が紅色で非常に美しく、園芸品種としても価値あるもので、一応上記の名称でよぶことにする。紅色の花をもつ株はまれに見られる。

フジカスミザクラ *Prunus* × *yuyamae* Sugimoto

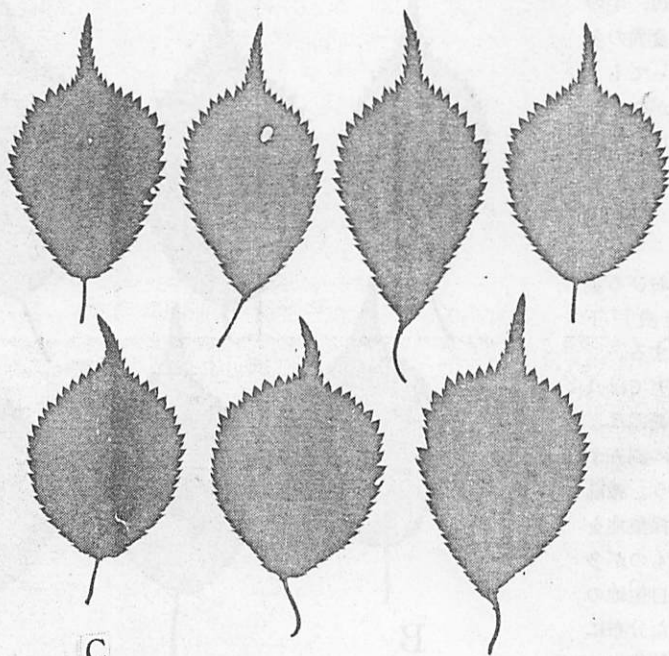
カスミザクラとマメザクラの雑種で、御殿場の印野

で湯山五策氏によって発見されたのでインノザクラの名もある。樹形はカスミザクラの形質が強く亜高木になる。花はマメザクラより大きく、カスミザクラに近い。散形花序ではほぼ新葉と共に開き、花卉は淡紅白色をおび、花柄は1.5cmぐらい無毛である。葉は広倒卵形あるいは広卵形で先は急に長く伸び、長さ4.5~7cm、巾2.5~3.5cmで両種の間の中めの大きさである。へりは重鋸歯あるいは欠刻状重鋸歯で鋸歯の先は長くとがりほとんど腺がなく、葉の基部にはマメザクラより大きい腺がある。葉柄には褐色の軟毛があり、葉の裏面と中肋、側脈にも毛がある。

富士見町広原付近、観音平上り口付近、八ヶ岳横断道路~大泉駅にいたる周辺の林内に点生する。

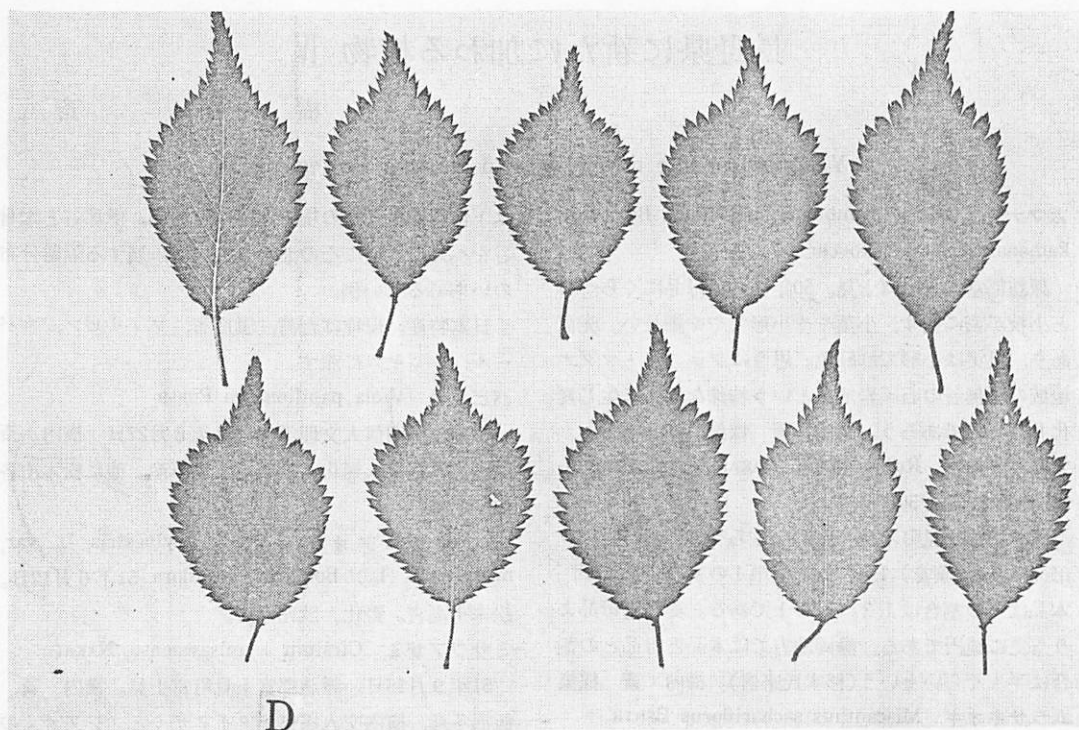
ヤツガタケザクラ *Prunus* × *miyasakana* Kubota, hybr. nov. (マメザクラ×タカネザクラ) (新雑種)

マメザクラとタカネザクラが混生しているところではそのいずれとも決めかねるような形質をもったザクラが点生している。基から多く枝を出してマメザクラのようであるが、樹皮には光沢があり、小枝も太くてタカネザクラに似ており、葉は花時にやや展開し、かく筒は紅色、筒状であるがマメザクラより長く、葉は一寸見るとタカネザクラに近いが、腺は葉の基部にあり、鋸歯の先はするどく尖って腺がなくマメザクラに似ており、さらに果実は黒熟するが酸味があり、基本的な形質からマメザクラあるいはタカネザクラのいずれかにかたより両種の間めの形質をもつものなど



C

Prunus yuyamae フジカスミザクラ



D

Prunus miyasakana ヤツガタケザクラ

あって複雑である。これは両種の間が生じた自然雑種と考えられるので、両種の形質をもった中間的なものにヤツガタケザクラの和名と上記の学名を用意して報告しておきたい。

散形花序で花柄はマメザクラより長く、小苞はタカネザクラより大きく、また総苞はマメザクラより大きくタカネザクラに近い。花時の葉は鋸歯に不明の腺をもつのをまじえるものもあるが成長すれば消えてしまう。成葉は広だ円形～広倒卵形で先は尾状に尖り、長さ3～5 cm、巾2.3～2.8 cm、欠刻状の重鋸歯縁で先に腺はなく、葉身の基部に腺がある。果実は黒熟し、酸味があり、マメザクラのような甘味がない。小枝はマメザクラのように挿木すれば活着しやすいがタカネザクラは活着率が低い。

ヤツガタケザクラは美濃戸の下方から清里の美森にいたる地域に自生する。なお学名は調査に種々協力を惜しまれなかった前記の宮坂誠文氏に献名したものである。

このサクラは八ヶ岳山麓のみでなくマメザクラとタカネザクラの多い富士山麓方面でも注意すれば見つかるものと思われる。

ミヤマザクラ *Prunus maximowiczii* Rupr.

花序は総状で、サクラ亜属の中ではかなり異ったものであるが、所々に自生しており、低木のものは葉は

非常にマメザクラに似ていて混同されがちである。両種共に葉は欠刻状重鋸歯縁であるが、ミヤマザクラは鋸歯の先には明らかな腺があり、葉の基部に近く縁の腺はマメザクラよりも大きい。また若い枝には褐色の毛が多いので区別できる。

ウワミズザクラ亜属の種としては次の二つが自生する。

ウワミズザクラ *Prunus grayana* Maxim.

シウリザクラ *Prunus ssiiori* Fr. Schm.

ウワミズザクラは葉が広だ円形あるいはだ円形で、基部はまるく、基部に腺がある。シウリザクラは葉が長だ円形、倒卵状長だ円形で、基部は明らかに心形をなし、腺は基部に近く、葉柄の先端にある。

シウリザクラの方が高所に生じ、美濃戸付近には個体が多く見られる。

参 考 文 献

- 諏訪教育会 (1970～1973) : 研究紀要 (第8・9・10集)
- 下伊那教育会 (1973) : 下伊那の植物 (中)
- 大井次三郎 太田洋愛 (1973) : 日本桜集
- 植松春雄 (1967) : 南アルプスの植物
- 高橋秀男 (1971) : フォッサ・マグナ要素の植物
- 神奈川県立博物館
- 横内 斎 (1967) : 長野県の植物